



西國三十三所名所圖會八

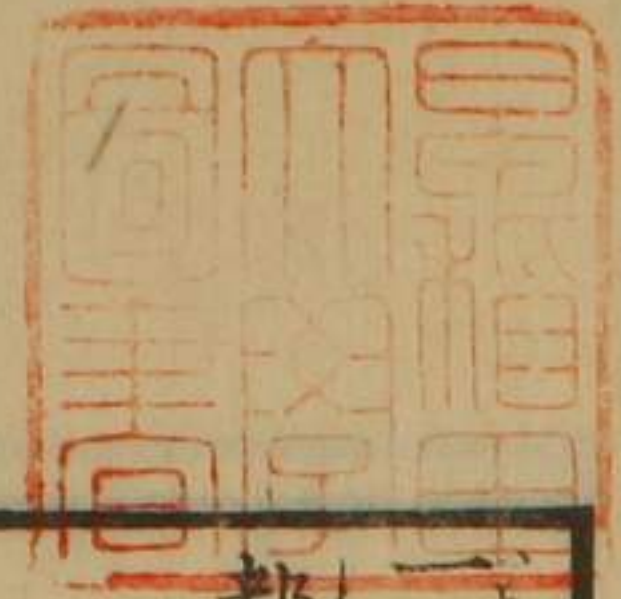
ル 4
3652
8





PA
1871
10

1871
10



都藍尼像

吉野新詠

禪丘登僊何處去 空傳片石都藍名

留與人間之尺杖 化為芳野萬株櫻

荒井公康慶平

元亨叙書曰都藍尼大和國の人あり精佛法と修練兼て仙術と學び吉野山の麓に居りこれ世の傳に多しを彼金峯山に柳黄金の地より金剛藏王菩薩のまこと讀み婦人の境内に入ると不空然と都藍言て曰我女身ありて下も淨戒と持ち靈感の驗あり争て凡俗の婦人比すべきやと乃ち金峯に攀登れ忽ち雷電騒々四方俄に晦暝迷ひて路を失はば時持所の杖を棄てりるんば其杖わづら殖く漸く大樹ともさる都藍と龍と咒しつ是に乗て山を昇りてづら泉源よりるゆき更なりつて進むる能はば其都藍噴きもいづら岩の上をゆくは其趾もあつて崩れさけを流す龍成養ふ池岩の下にあり實も二つあつたの遺跡いまも現存せりて世に

昭和廿三年
九月廿二日
購求

言多中此丘長生の道と得るは其終るもつて知れり
 一説大峯山上行場の道足研山と云ふなり此所二尺許の石像あり谷の
 母公の像と言ふも是も則ち都藍尼の像なり叙書云謂登山の折忽ち雷電霹靂
 して進得はつて嵩と崩せり古趾あり足どり山といつて其像と爰造て
 まるせり

都藍尼影像

此國一の坂一建る所の
 石像一ハハ
 吉野山奥院
 安禪寺本堂に
 安する所にて
 長二尺五寸許の
 木像なり
 今其影像とて
 板行一普く諸人
 授くるもの
 地所一遠近の遠いれも因て出



世人誤つて此像と役行者の母公と言傳つりト云此説とつても聞也

丈六山一藏王堂

長峰薬師堂

本尊 薬師瑠璃光佛

村上彦四郎義光之塔

同忠照之碑

一の坂より登る山中右の傍有藏王権現役行者と安ん左六間と二四のころ
 この辺に長二尺の坂より凡十五丁目是より長峯の薬師堂と凡十町余
 一の藏王堂の次あり僧舎一宇堂の左隣り堂の向う一茶所なり
 村上彦四郎義光之塔 薬師堂の右の山の上あり元弘二年正月十六日吉野の
 合戦大将大塔宮藤原親王の代つてあり自ら授けり
 銅の鳥居あり凡八丁余
 右塔の下より大明と奉高取内藤氏建所

忠照之碑

碑文上三列ス

元弘之亂大塔王出據吉野東師圍之七日不克東人宵潛入金
 峰昧且三覆齋起鼓謀而進王環甲出戰身被七矢流血及履未
 遑拔矢還入藏王堂立飲于庭中小寺相摸斬一人柱首劔鋒歌
 且舞村上君諱義光棄敵走回謂王曰彼熾我燿巨願賜王鎧衣
 代王而死王曰死則同所君厲言固諫進鮮王衣登樓呼曰神孫
 帝子今已自裁若等蠢死亦不久志以爲法說甲投下剗腸榔聲
 銜鋒而悅東師大驚解圍爭獲王送君子義隆見君臨死與俱君
 曰叱若衛而義隆乃從王鬪殺數人而創走投竹中屠腸而斃王

適高野遂殲渠魁嗚呼方王事多難君之忠烈百世之後夫婦之
愚尚猶誦之景文每及之未嘗不髮上乃樹貞石于此以勒大節
辭曰諫則屈誨則信得仁哉若人由義哉若人

天明年冬十月

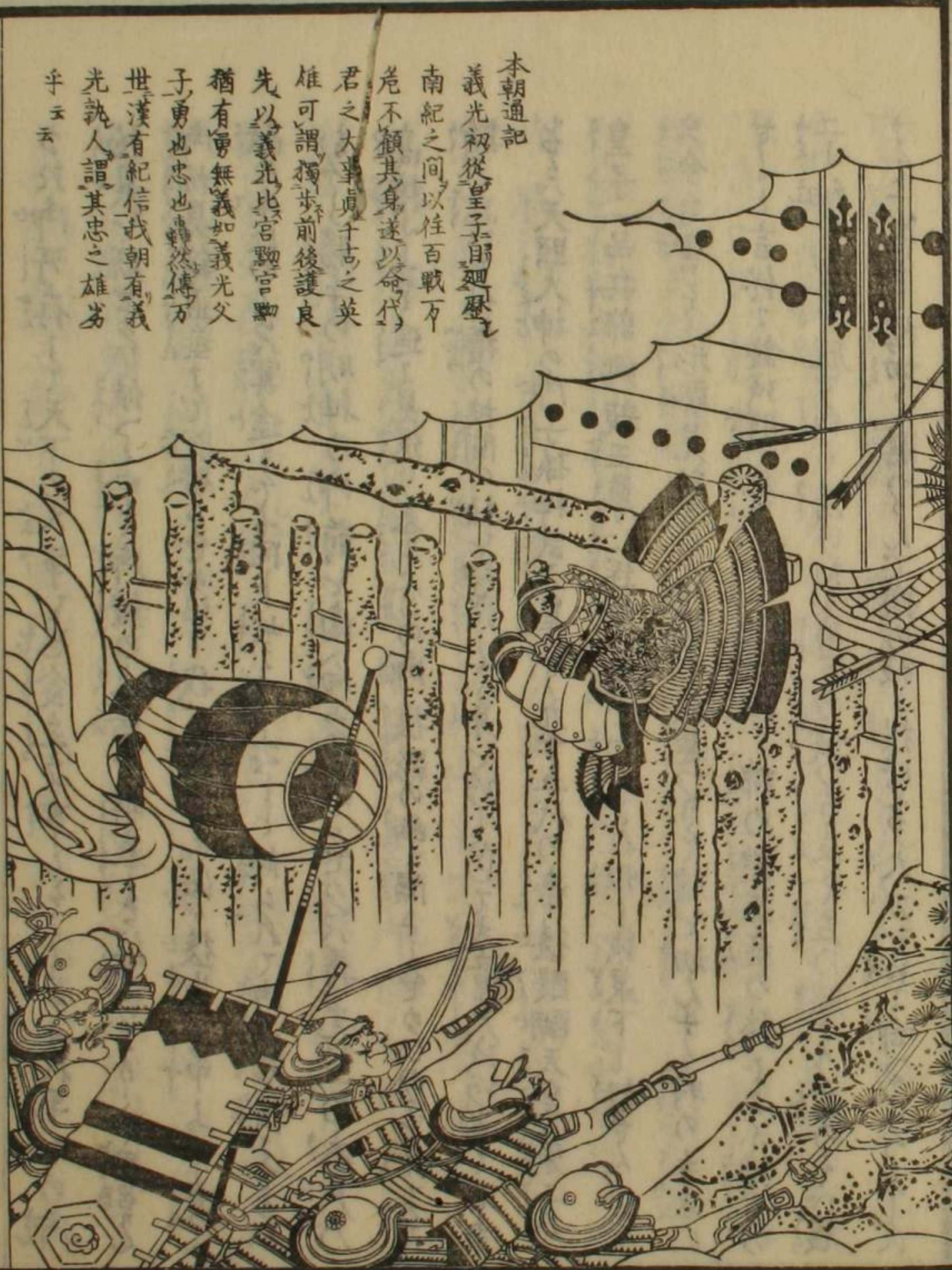
高取 内藤景文武立

太子記

宮ハ藏王堂の大庭ニ並居させのひて大幕打揚々最後の御酒宴あり宮内
鏡小三所の矢七筋御頼され二の御腕二箇所実をさせのひく血の流る事備
のひて然つてもも三つて矢しも抜ばちが血も拭いけぬ敷皮の上より
大盃と二度傾けさせのひ小寺相摸四尺二寸の太刀の鋒敵の首を貫く
宮の御前ニ畏より戈鋌劔戟を降ひて雷光のぶくもり盤石岩と飛ひ事
春の雨ニ相同然るも天帝の身ハ迫づる修羅かれが為破つる
唯し揚て舞たる有るハ漢楚の鴻門會也時項伯と項莊と劔を抜
舞ハ契噲を舞に立るハ帷幕をわけて項王と睨し勢も斯や覚ゆ依
かりたり大手の合戦急也と覚く敵御方の時の聲相文とて聞こり
實も其戦ひの自に相當るも多うりや見こ村上彦四郎義光錯つ

とつるの矢十六筋拈野小残る冬草の風ハ折懸く宮の御
前ニ系して申るハ大手の一の木戸言甲斐も責破られつる間二の木戸
支く數刻相戦ひ候はしは所ハ御所中の御酒宴の聲冷たく聞え
候ひは不付く系つて候ふ敵をよかた取上つて御方の氣の疲れ候ひ
ゆま此城にて功代をん今ハ叶ひ候へ候ふ未だ敵の勢と余所
廻り候はぬ前ニ一方より打破つて一先落て御覽何ぞ存候ふ
但し跡に残りて戦ふ兵も御所の落させぬ者あり心得て
敵に追ひつても追ふも進せん覚候は恐き事候く
おもひながら候ふ錦の御鎧直垂と御物具と下りひて御諱字と
犯し敵と欺むき御命に代り候はらんと申られ宮争も有
ぞと死ハ二所とこそ免も角もあはれ仰られりと義光言と荒らばて
斯る浅猿き事や候ふ漢の高祖棠陽に圍われ紀信高祖の真似と
しく楚と欺むるごとく高祖の事を許し候はばや是程小言甲斐

本朝通記
 義光初從皇子則廼歷
 南紀之間以住百戰不
 危不顧其身遂以命代
 君之大事貞千古之英
 雄可謂獨步前後護良
 先以義光比官駟官勤
 猶有曾無義如義光父
 子勇也忠也轉然傳萬
 世漢有紀信我朝有義
 光孰人謂其忠之雄劣
 乎云



るに御所存して天下の大事と思食する事とてこれ早々の御
物具と脱せの候て申て御鎧の上帯と解奉まが宮げより思召る
御物具鎧直垂を脱替せのひて我若生るは汝が後生と吊る共
敵の手にかゝる尊途まも同岐の伴とて仰られて御涙と流さぬ
あつて勝手の明神の御前と南向て落させぬ義光二の木戸乃
高槽小上を遙く見送り奉て宮の御後影の幽く隔てせのひりて見て
斯く思ひんば槽の校間の板と切落し身とわくはて大音声成りて名乗
ちる天照大神の御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇第二乃
皇子一品兵部卿親王尊仁近臣の為に亡がれ恨み涙泉下し報せん
只今自害する形勢見おとて汝等が武運つきと腹と切んずる時の手本に
せし言俣に鎧脱て槽より下へ投落し錦の鎧直垂の袴をうし練貫の
二小袖と押層脱て向く清げなる層に刀成つと立ち左の腕より右のそ腹
すて一文字に拵切く腸つんで槽の板に投け多太刀と口を啣てうづぶら

成を臥しりし依大手搦手の寄手あれと見るともや大塔宮の御自害
の我先し御首成りしんと四方の圍成解く一軒集る其間一宮ハ
引遠く天比河へと落させぬ南より廻りて吉野の執行が勢
五百余騎多本の案内者あま道と要をかた廻りて打ち奉らん
取籠る村上彦四郎義光が子息兵衛藏人義隆ハ父が自害しつる時
共腹成切んと二の木戸の槽の下で馳来りたり成又大に練りて
又子の義光も事なれぬ且生る宮の御先途成見と進ませ
庭訓と残りしをバカリと且の命をのべて宮の御供を候ひける
落ゆく道の軍事とて急々討死せぬ宮落得させたりしや
覚へもれば義隆一人踏まうて追つか依敵の馬の緒膝薙下
切す平頭切らか落させ九折ある細道に五百余騎の敵と相受く
半時をうぞ支つて依義隆節石のおくあつてども其身金鐵あり
され敵の取巻て射る矢も義隆すの十余ヶ所の疵を被むるも依

死ぬるも猶敵の手よりかゝりしや思ひもん小竹の二村より中へ
走り入て腹かき切て死より村上天子敵とせ死討死し其間宮ハ
虎口死成御適も有る高野山こそ落させのひり候多
千本櫻 長嶺二回見る櫻より俗に千本櫻といひ此地と千本と言ふはせり
喜野行

大納言 雅章

富士ハゆきとむつ何乃と〜みやう
花さつと山々日あけはけり

鬼貫

日本花 七曲の坂の上り峯谷の嵐山 長峯の薬師まつり

七曲 是多武峯の行路にて飲貝丹治り登る道より吉野見物ありて多武峯行ハ
大和巡覽記曰吉野山のり六田入る本道あり吉野行人は先きの道より

松山御茶屋古蹟 多武峯のり六田のり文禄二年二月廿五日豊臣秀吉吉野の
遊覧の時建の御茶屋のり此時の御詠哥世のり

西六ノ四十一

日本花七曲の坂もどき行り人桜苗より
のり又十のりつこ苦野は我植也は成来てん

大納言 雅章

藤尾坂 俗に藤井坂あり文治元年十二月十七日源義経の愛妾静藤尾坂と下り蔵王堂
大橋 吉野の町入口より豊臣秀頼公の御再建
豊富朝臣秀頼御再建 奉行建部内匠頭光重 慶長九年申辰十月吉日云

開屋花 藤井坂の右より 黒門 吉野の町の惣門
金鳥居 吉野の町の中より紫銅にて造り高さ二丈五尺柱の周二丈一尺
額發心門と書り弘法大師の筆あり是より三門を凡三丁余

二王門 金剛力士の両像と安ん
國軸山金峯山寺 本堂 南面より土間四百高十丈一丁云
本尊 蔵王権現 三昧あり安置あり 長二丈六尺 魔障降伏の相也
不動明王 役行者本堂内安置あり

躑躅大柱 中尊八叔迦佛 左千手觀音 右弥勒佛の身体あり
堂内右の圓より周凡二抱半余り俗に立樹ありて六丁より往昔諸堂
再建の時吉野郡榎尾村より寄附す所云



観音堂 本堂の巽より 経蔵 観音堂の左あり

大塔古趾 本堂の西より礎石の上へ假堂を築き 二尊佛と女八
兼曆二年十一月金峯山の塔供養の事 釈書に見ゆ
本堂の前より大塔宮ありて舞臺と奏しめいり所あり

四本櫻

大銅燈籠 四本桜の間にあり高凡一丈余 紫銅よりて造る
文明二年辛卯九月十日鐘
正石壇の下右の傍より

千鉢地藏尊 恵心僧都の作 稻荷社蛭子 大黒天社 同石壇の下
左の傍より

當山六役行者の開基として文武天皇大寶元年の建立あり

神社考曰昔役行者吉野山に在る時神釈迦の像と現れ行者曰此形衆生と

度難し次彌勒の像と現れ尚曰未也次蔵王権現出づ甚怖る之乃

負あり行者曰此我邦の能化也多蔵王権現ニ鉢中尊の本地八釈迦如来

左本地千手観音右の本地八弥勒菩薩也云往昔伽藍巍々として貞和

五年正月十四日越後守師泰武蔵守師直寄来る所帝天の河の真賀名

生の辺に落るるをいへて焼拂て皇太后相雲客の宿行り火を

る程二丈五尺の金の鳥居金剛力士の二階の門北野天神社七十二間の

廻廊廿八所ありび蔵王堂一時小煙ありと太平記小見たり其より年経て
豊臣秀吉公の時諸堂あり成就と聞

其始り 蔵王堂 文武天皇 大宝元年建立 二王門 天智天皇 白鳳十二年建之
金鳥居 醍醐天皇 昌泰元年建之云

大塔の古趾の傍に鐵製具あり

按る大塔の露盤の類あり鉄

全焼破しく見ゆ然れ先記に

貞和五年の兵火の物あり

威徳天神社 本堂の右大塔古趾の
左に隣る

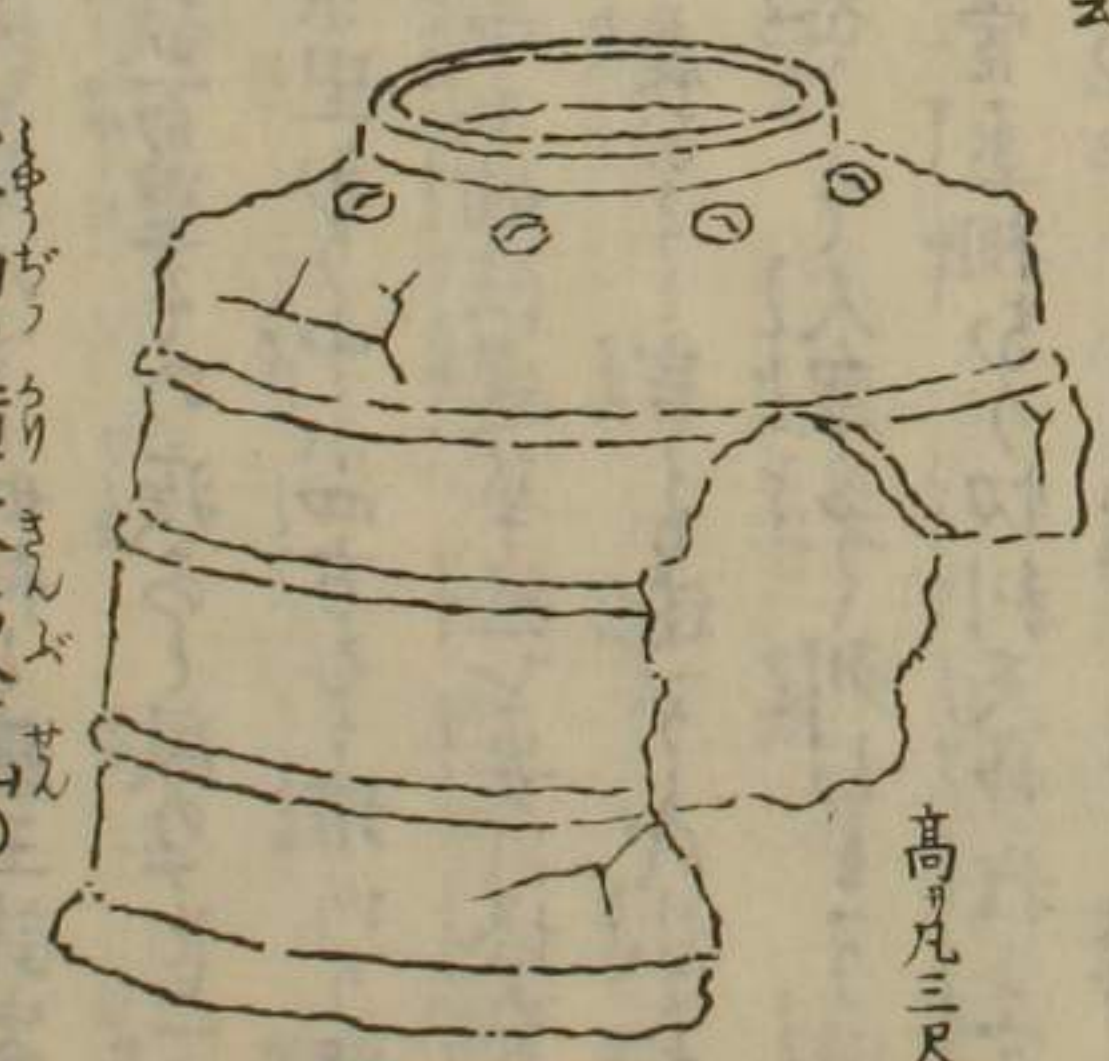
元亨親書 菅公の霊と等る 天慶辛中日蔵上人建之

天慶四年八月沙門道賢と言ひのり冥助を借て金峯山の

金剛蔵王菩薩小見の時五色の光ありて金峯山伐照は其時道賢白て

曰く此光はつる祥瑞ありやと蔵王の曰く今大政威徳天来りんとす相

あり須臾の間に西方の空中より千萬人至り来る其儀相衛護乃鉢



高凡三尺許

巍々として見ても亦宛も王者の郊禮にも似たり其衆奇の形異なる安
く或は金剛力士のごく或は雷電神夜叉羅刹のごじ甚と怖るに類ひる
各器仗弓矢矛戟と持ち時大政天蔵王とかく己をてまゝ帰去んと
欲し道賢と顧て曰此人と將く我居處と見れば如何と蔵王許容せり
道賢として一の白馬に乗り行支數百里その疾く風の如し二の大池
あり池の中小大なる嶋あり廣く百余里あり中四方なる壇あり壇の中に
蓮華臺あり臺の上寶塔あり塔の中妙法蓮華經と安んじ塔の東西壁小
両部の曼陀羅と懸くその塔の嚴奇麗なる言も述べば北に大城あり
城門の禁制衛護の躰も嚴密として人衆多く列あり時大政天
道賢と語りて曰我は上人の本國の管丞相あり忉利天帝我一字して日本
大政威徳天と呼ぶ我徳言に依り配流せり時ありと動するに我は
我國土の一切疾病災難の事と主と我君臣と惱み人民と傷らんと欲し
又思ひて我生前悲位の候と以て化して大雨とほ本國と浸して水海

く八十四年を経て國土に成りて我住城とせん然るも此國普賢
龍猛の密教と流傳りたる地あり又應化の諸聖悲願力と以て名と明神借
諸所遊行住在于普く衆生と覆護し彼諸の名神常く我を慰諭せり
我は佛教と愛重し故に巨の害成るべし但し我十六万八十の諸乃眷屬
暴惡の鬼神等處處に隨つて災と身に我を是と禁制し我神
慰を受けて法樂と味く昔日の怨懟今い少く息も依り道賢の曰
我國の人民俱く大雷神と稱して尊重禮敬する世尊と瞻仰する
何とて怨りりや大政天の曰く國俗我を以てすて仇讎せり
誰りて尊敬せんや又大雷神は我第三の使者とく大雷氣毒王とい
者あり是我名といはれ我在世の時歴するの官位人の是に居る
あま我を害意と起は是昔の怨の甚しに因てり然る今一の
誓をまゝ本邦にも遺りて上人あまを傳てて普く世に流布せり
下若人我形と作し我名と稱し懃懃小尊重せ我必り彼を擁護



西八十四

してん若人上人の言を聞き既信受し崇奉せ我又上言とてその害と
 為るべし夫れも道賢ハ金峯より上伴の事と陳せり蔵王の曰く
 我汝より彼城むむい見せむとて世間災難の根本と知めん為ありと云
 道賢此時名日藏と更む命後上人當社と造る威徳天神宮と鎮奉也
花供懺法會式 例年二月朔日 餅搗 正月廿六日より廿八日に至る
 抑此二月會式より俗に花供懺法と稱する事と當山の太礼あり則ち蔵王
 権現の祭式天下泰平五穀成就の祈禱あり先其例式のゆへは正月廿六日
 より廿八日まで三ヶ日の間吉水院寺僧方と云天台宗也是と花供と稱し密衆院蔵堂
 眞言宗也是と 兩院の行所正頭部屋云山新設意に於て餅と搗事廿四石
 天台方廿石
 行所板敷の上白布を櫻として作し杵を以て数多の役人群が是を搗く
 杵千本あり俗に右の搗者其姿頭は烏帽子のてれた物と被り其上は白布を
 包み目をくり出して残らぬ面を覆ふ身は筒袖の白衣を着し注連縄を以て
 禪の凡て米を洗い亂して蒸し白くして搗りて鏡の数をとりて神と

供とて聊も手とて事なく皆抄子箸を以て取扱はる嚴重あり命後
 蔵王権現より満山の堂社の餅と供し御供神酒も供す
絶行 正月廿六日廿七日兩日花供懺法の兩頭坊より米十石と施行はれ依て近國
 近郷の貧人を可駭し群集し米を乞ふ事雲霞の如し
 二月朔日卯の刻御供餅の粿八基一池より四基あり凡八人てこれをかき
 前寺院の高張の灯籠多數置置 蔵王堂に
 昇来すてろを供供へ○早朝叡山の僧正来りて天台方の字頭の坊に入同
 南都より出役方二頭来りて石壇の上の役所に着
 同辰の刻當屋衆四人 餅搗の主家黒頭巾に櫻の紋とて冠を身は櫻の大紋
 次懺法講中 上下を着し一方臺は五色の餅を盛り正中は 次正頭行人 淨衣五條袈裟
 兼五十筋 三傘一本 毛鎗八筋 四茶 校箱十對 一流僧徒 七條袈裟後校箱
 五條袈裟素絹の一鴈二鴈三鴈四鴈 兼物若黨八人伴僧二人先校箱後校箱
 類も有此列天勢 町家より崇教の供奉人上下を着し大勢ありて此行列の
 あり青竹となりて笠の從者左右大勢あり 花供講中 蔵王講中 懺法講中
 種々の供物 當日役寺僧 兼物若黨三人先校箱 蔵王堂の石壇より一町をり手前より
 下乗し花皿に散華と盛て道路に散す 神主 鳥帽子狩衣 懺法方 廿人 花供方 同
 從者

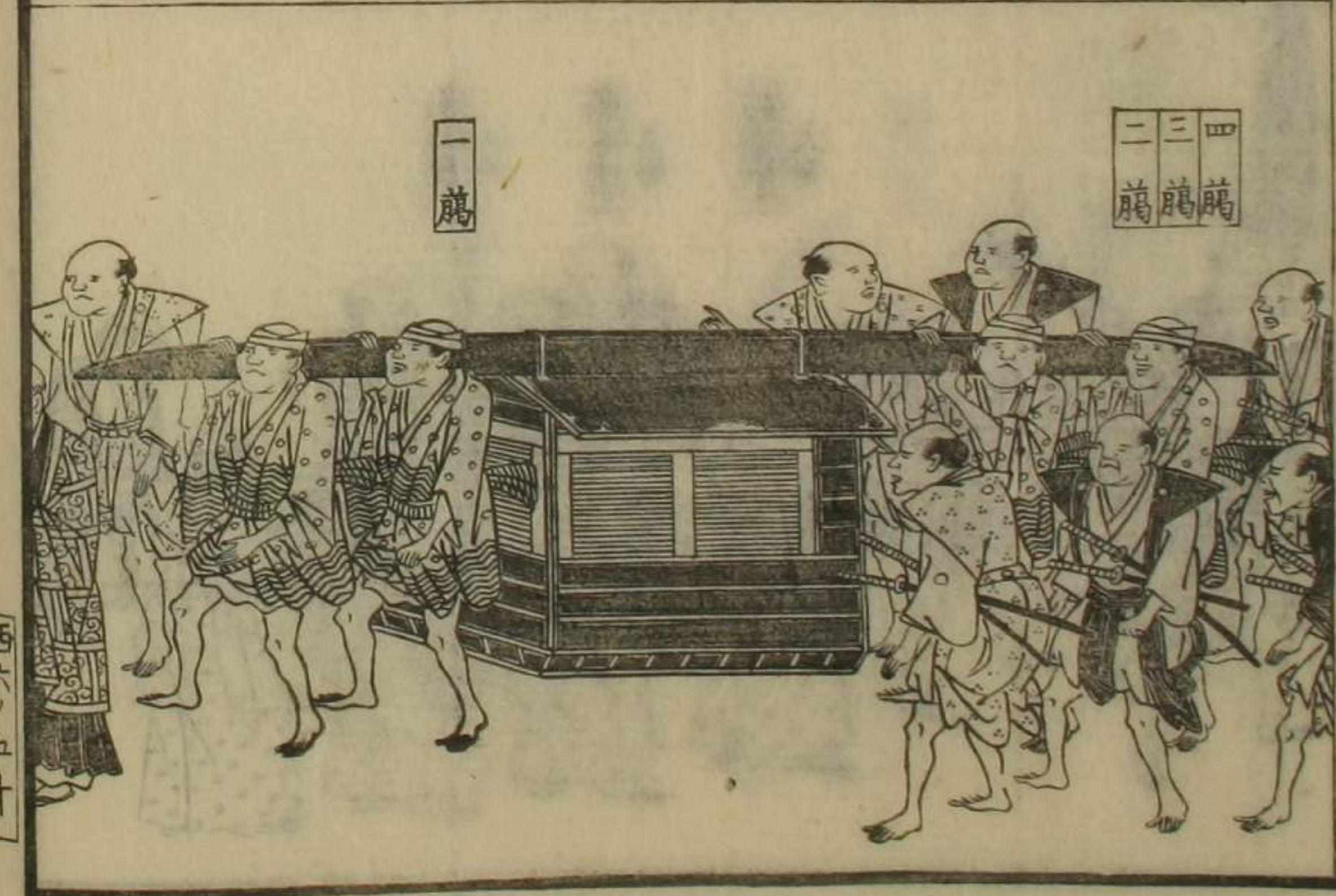
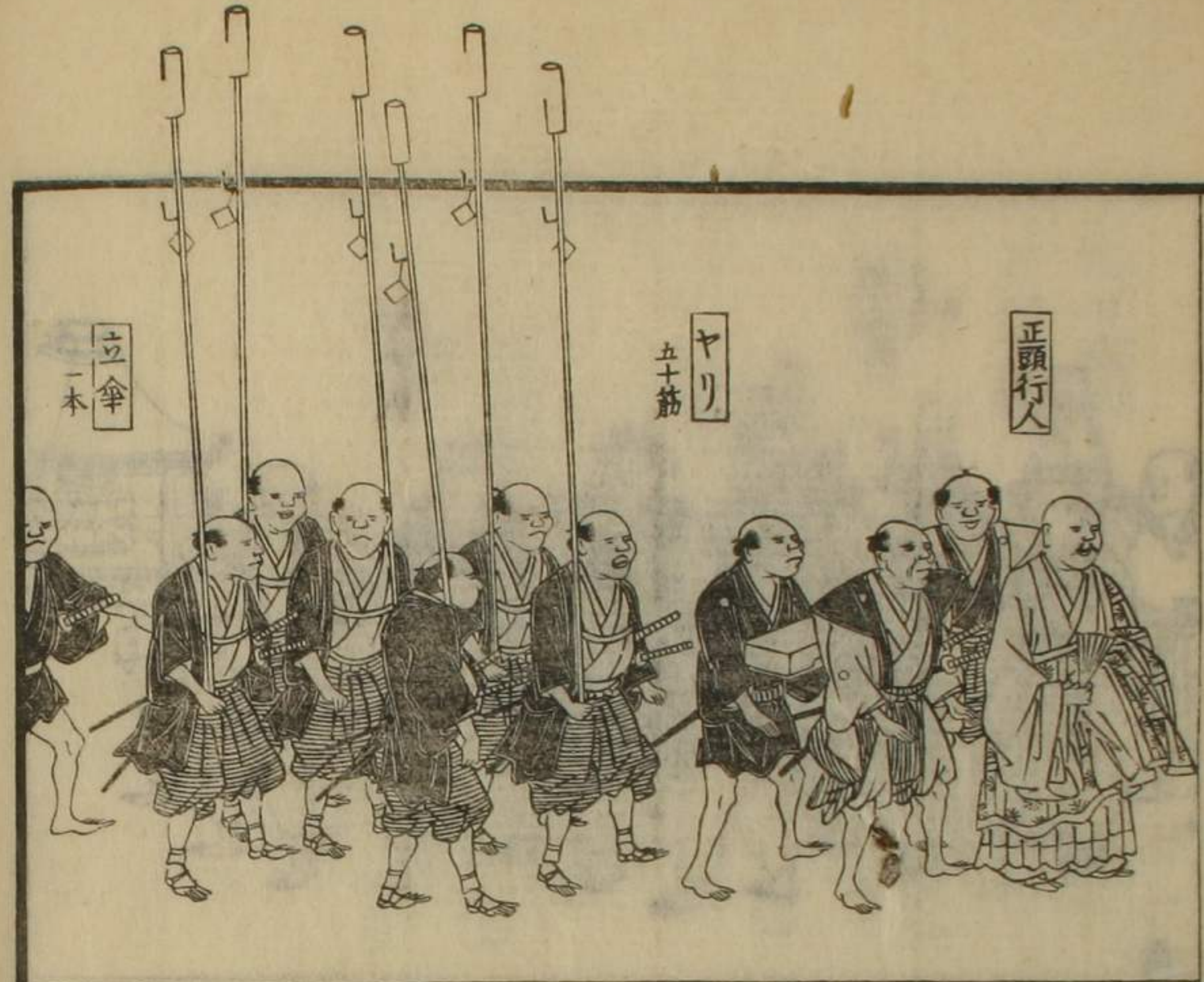
両派の俗人ともつれも 右の行列づれも蔵王堂へ系りて夫々の祭式ありて蔵王堂
 於て一山の僧徒と初め諸國兩派の修験者堂内に充滿して修法勤行嚴なり
 午の下刻に至りて堂前四本櫻の傍の舞臺にわづく猿樂を奏し 南都より役者
 常いし會式より後却供の餅とさげて四面に撒くは夥し是吉野の
 例幸あらん 猿樂終りて後却供の餅とさげて四面に撒くは夥し是吉野の
 餅撒くは 其構一間半四方なり高さ二尺餘りの床の上四方に手すりの高欄あり上りて
 右吉野在家の俗人より由緒ある自家の人より則ち諸國に出て花供職法の進ずる役者又右人の
 内二人は里頭の鬼の面をかき姿も鬼形に作り餅をささる傍に舞臺より一山の僧徒音楽のや
 又暮つ時より五ツ時ごろまで蔵王堂前の石壇より左の
 餅配 是は御供の餅とさげて一山の寺院毎より且吉野中の人家毎より餅配るなり是を
 その上堂前より事あらん 吉野のりちる餅とさげて一山の寺院毎より且吉野中の人家毎より餅配るなり是を
 月事類いなり一奇なり
 花會式 例年六月七日 俗に蛙飛の神事なり
 六月七日己の刻真言一派の僧徒蔵王堂に出勤は此時正頭の行人二人蛙の
 襷束と着し堂内に居る稍く僧徒讀經修法より既し修法終らんとす時
 一鵬の僧徒蔵王堂へ系る午の刻より一派の僧徒下の一の蔵王堂 長峯の神
 堂



花供職法會式の餅搗
 二月會式の餅搗は吉野の坊中
 備掌寺僧方の兩院の正頭
 部屋の板敷の上にて是と搗く
 正月廿六日より廿八日まで三日の
 間餅米の都合九百八人数千人
 許千木是旧例に云
 都合八輿
 凡四八五方許
 御供餅の臺
 五色餅
 餅搗盛て
 是の餅を人として解て
 蔵王堂へ供ふ







蔵王堂蛙飛修法

言水
蛙の
寺の
言水



輿を迎ひて至る。今後神輿をむく奉りて蔵王堂に遷り是を祭依とて
末の刺し及ぶ。又酉の刺より一派の僧徒出勤して修法のり斯く一鴈乃
僧蛙の行人の秘文を授く是より忽ち正氣を失ひ萬端蛙の所作とて
行人兩人が壇に登りて蛙を呼て秘文を授く此式行人許多立かり屢
行ふ始終蛙の形勢とて此彼に飛りて人心を失ふ一鴈終夜修法のりて翌
朝に至りて全く終る蛙の行人も又本心に歸る此修法のり法も秘密此義を
聞ふは是よりて昼夜も遠近より系詣群集して賑ひ諸又翌朝一派乃
僧徒神輿を送りて一の蔵王堂に納む

吉野山一名

金御嶽 又名

金峯山 又名

國軸山

東北深遠にして量るべきは
東西凡一峯二里許也ト云

拾芥抄曰 天竺佛生國のりて関あがり飛来て此山とありと日藏上人の傳
りも見てり又の説は唐土の五臺山の岸の端うけて雲に乗れ飛来るも
りて江中納言のみまけ御塔の御願文も斯くも記さるれ又貞宗禪
師は唐土小金峯山とて金剛蔵王の住のいり山なり此山より飛来て金峯山と

あつて書れり 狩吉野山満山桜樹して花時ハ積雪の朝のじ 登皇聖客
あつて遊賞し其名中華に聞て天下の名勝ありき

義楚六帖云日本國都城南五百余里有金峯山頂上有金剛藏王菩薩第一

靈異山有松檜名花軟草大小寺數百餘行高道者居之不曾有女人得上

至今男子欲上三月斷肉食欲色所求皆遂云菩薩是弥勒化身如五臺文

珠

本朝七高山の内一々其上ハ黄金たり因て金御嶽と稱し聖武天皇東大

寺の大佛と鑄んと欲し々々の金と求めり時良辨僧正に紹して當山に金と

求りむるに藏王権現此山の金伐取て莫きと告げしに終りのりて

萬葉 見吉野乃山下風之寒久爾為當也今夜毛我獨宿牟

古今 吉野乃山下風之寒久爾為當也今夜毛我獨宿牟

吉野川

水源ハ大臺原山より流きて塩葉伯母谷 吉野川と經て東川に合す 而名遊副川と云
られし程尾と歷て菜橋村に合す 吉野川に合す 立野 飲見 上市 土田 土田 下市
新住と經て宇智川に合す 吉野川 三吉野の大河流ありて

友則

和州順覽記

吉野川その水上と尋ねき津の瀆く秋の下露と録る如く源ハ一野ハ一河と

々々を思へ但西風ハ東水多く流きて宮川の水と増る東風とげり

吉野川の水と北風ハ熊野河の水多れり故に東風とげり

雨降ばく吉野河の水ゆるり上市より下河の渡り廣くす

紀の川あり紀州和歌浦に出流す

萬葉 今敷者見日屋跡念之云吉野之大川余杼乎今日見鶴鴨

古今 吉野川春の疑やう風を産み給ふと云ひに

實城院

藏王堂の執の方 又ハ金輪寺とも云建武二年より後醍醐天皇皇居決定れ

北朝と南朝と相りれ幸号すも兩朝より出たりて同かば天皇勅して新葉和奇集と

撰れり又御手づり茶入十二と刻せり或は是と世に金輪寺と云ふ漆器といひ

あつて勅作の品るに金輪寺也といひて茶湯も有し聞ゆ南朝四世五十六年此間

の皇居の地にて則其時の皇居の傍と作らる程に殿屋美麗して後世乃

及ぶ事も尋常の御座も有て貴帝の時辺りの美景と詠りゆ

於た林かじと雲これれを路乃興此月雨のそ

後醍醐天皇

横笛一管 鐘七太時 執望二管 羊皮鼓一面

尚此余種々ありしをりるるに畧はる當院一山の政所

櫻雲記曰

南朝興國二年 北京曆 新帝 後村 吉野と帝都とす

卿雲客微少已て昇進除目殆断絶せんは於是二月下旬源親房常陸小田原城

居して職原抄二卷と作て吉野へ献奉る百官諸位職掌と指ぐし未代に至つて

帝都の龜鑑らしむに親房卿博識宏才にして今東國に於て文藻一軸も不從

して輒くあれと著はく只凡慮のあつた所はあらん

吉水院

藏王堂のサノ先の町より 當院も後醍醐帝の行宮として建武元年二月の

遺奏呈文あり又正平弘和元中明德の幸回賜し所の繪吉むひ越智家頼筒井

順慶ホの願文あり抑此寺の草創は役行者山上修行の時姑息の庵室あり其のち

醍醐の聖寶尊師もあはれ蹤とありあかき源平兵乱は源義経辨慶もあはれ

藝一軍議と謀るる二年及りして其居席今破壊せは庭前は駒は尺

蹴武蔵坊が力釘今其形と遺は往昔文治元年源義経大物の浦より風波は難

のれ此山に登り夜入て密に此寺小る吉野法師も義経と討んと世也又此寺と出

中院谷不隠きに悪徒おもも跡と求め来りれば佐藤忠信と残して防矢射

させ静と捨て身武峰より十字坊入是より又十津川落りて也又後醍醐

帝京都と逃きよめ此山に潜幸あり時先當院へ行幸ありて行宮と後

實城院に移りて此院の床成御枕とて詠のひし御哥

後醍醐天皇

後醍醐天皇御物 竹之御文臺 同竹之御硯箱

秋齊閑語云

吉野山小吉水院より有太子記吉水法印宗信より此任持して後醍醐

天皇の姫宮と下され妻帯りしが今清僧の寺にあまう此寺親房は自筆の

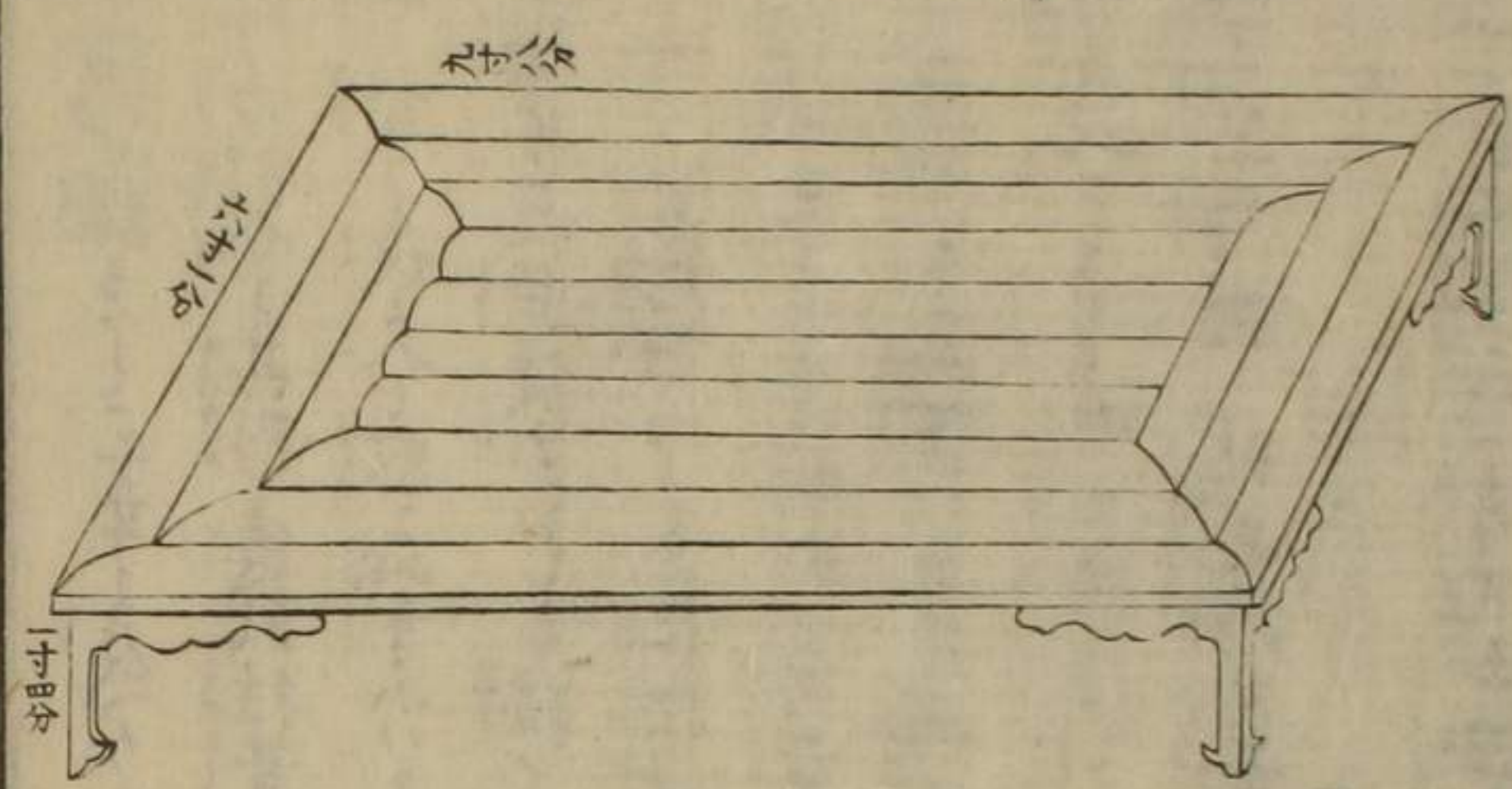
職原抄あり今接する吉野拾遺みし野の山は山守とて今の日有て花咲かん

と後醍醐帝の尋ひよせの御返しの花さうん頃ハつゆも白雪乃ゆき
 まるぶらみけしや申上るる此寺の事こそぞ

後醍醐帝

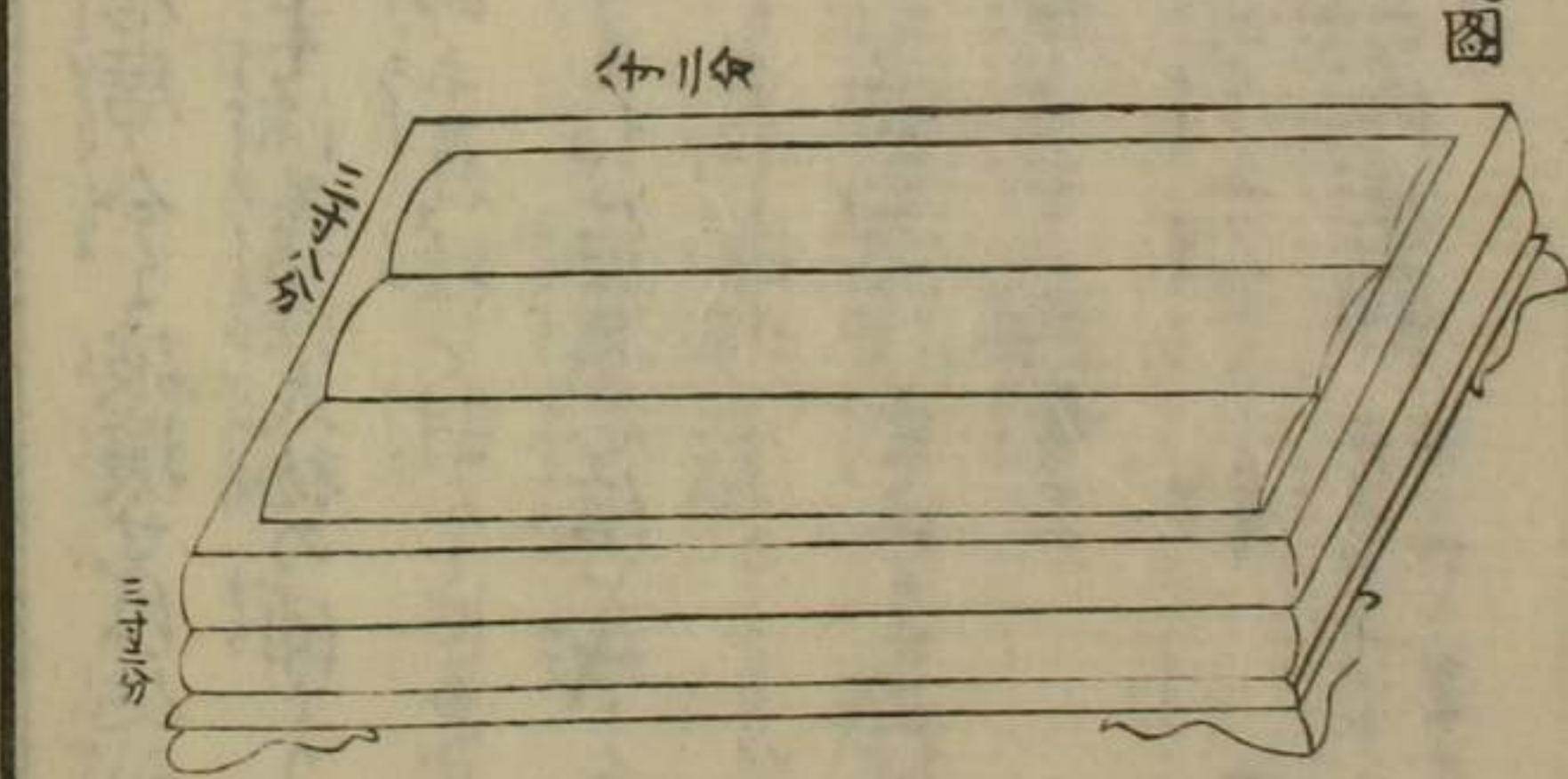
御物

竹父堂之図



同竹硯箱之図

内墨塗



西六ノ五十三

尚近く八豊太岡も吉野花見の時此院へ入せめりてあし聞か
 蔵王堂へ近り 朝の魚 駄天山の東の方あり 五臺寺 燈爐の仕り
 右の方あり

駄天山

續後拾遺

櫻本坊

後醍醐天皇御幡一流

楠判官正成矢筒

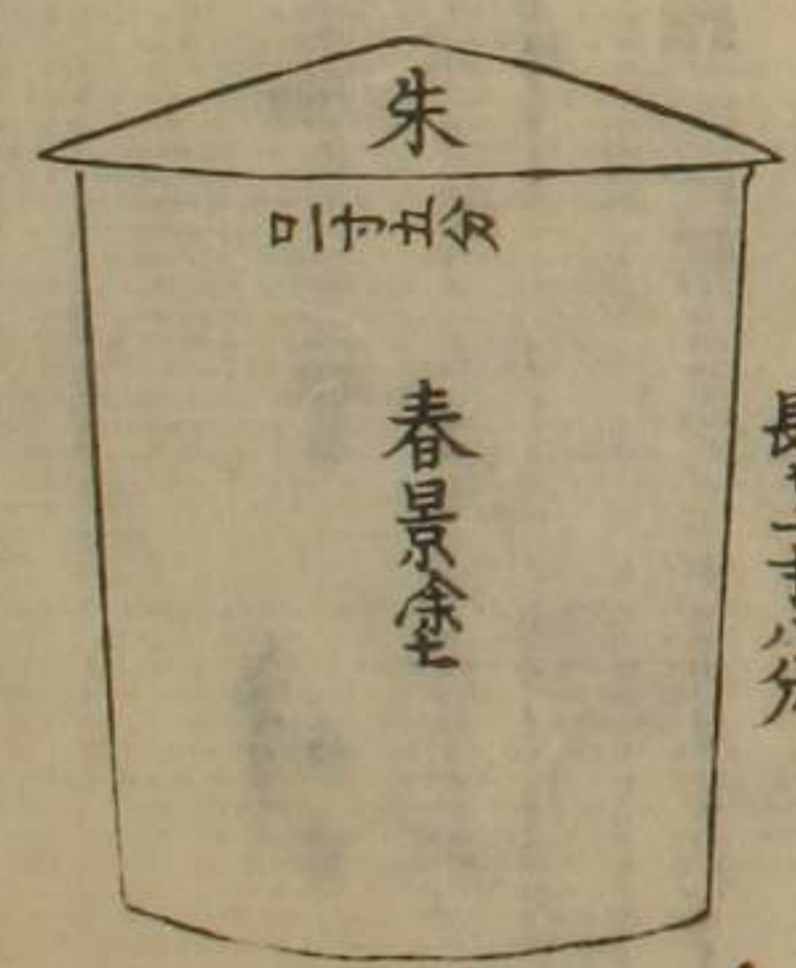
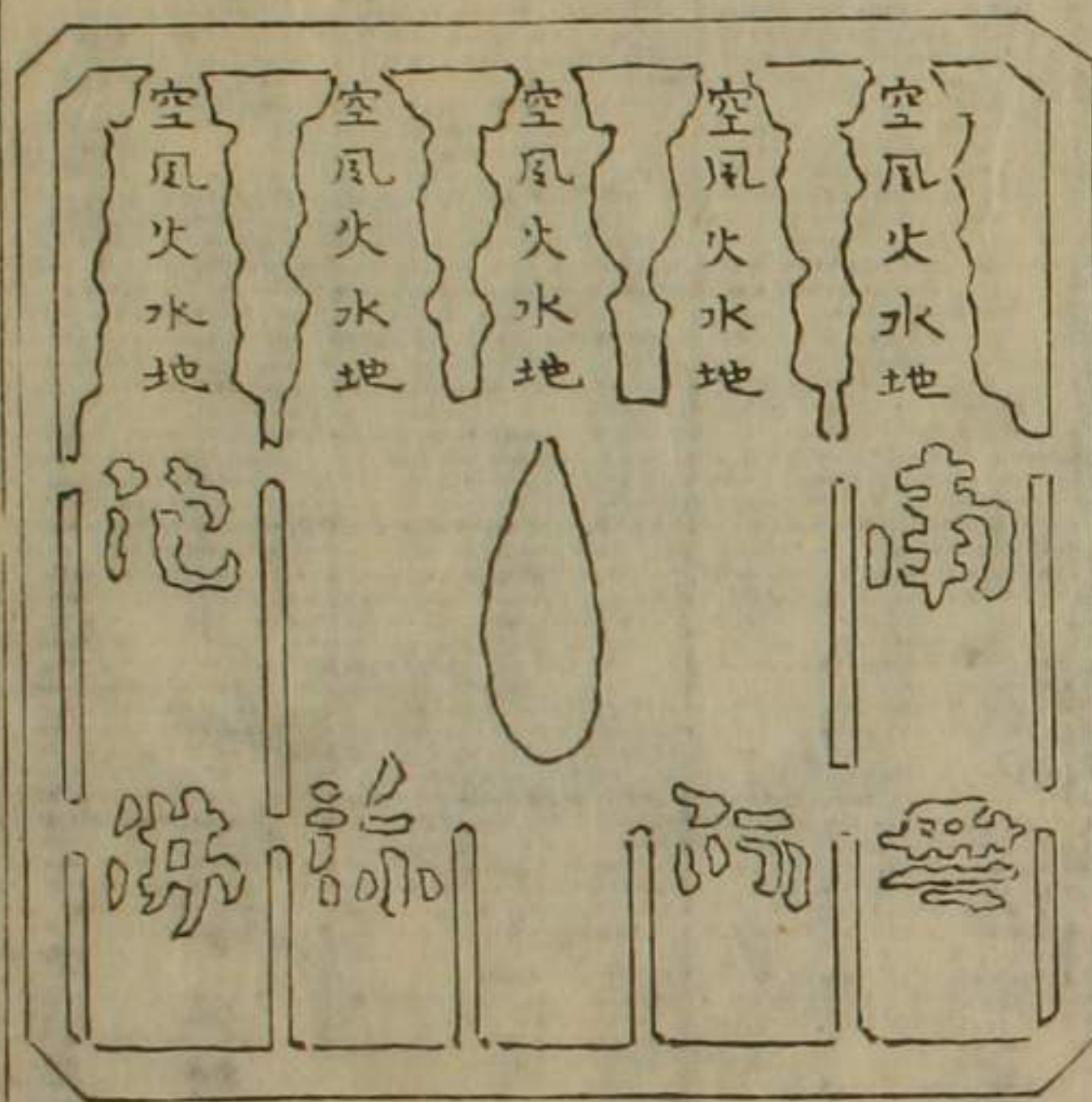
劔一振

寶明高徳行光作 元慶三年の銘有

後醍醐帝御勅作 金輪寺茶

長サ一丈八分

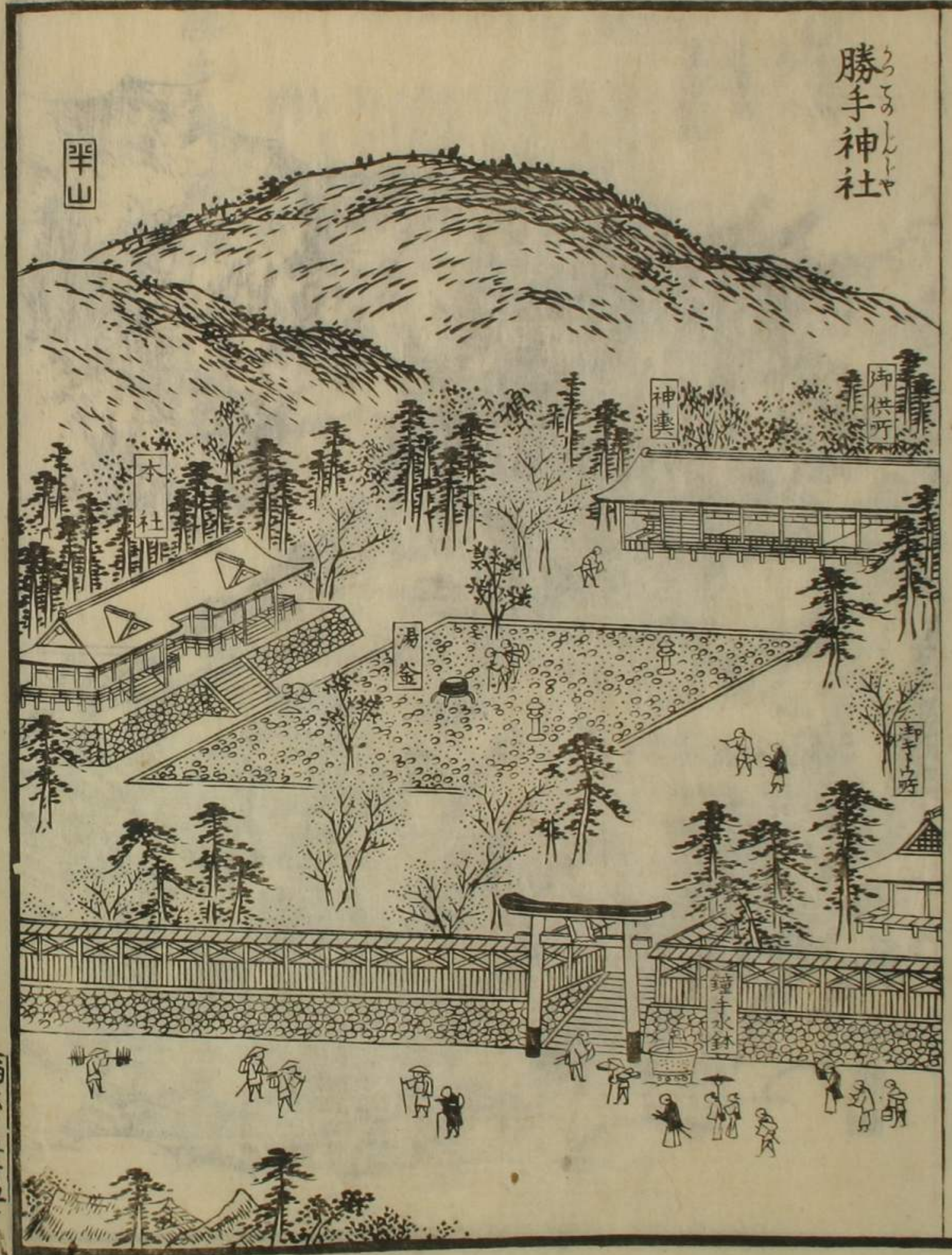
村上義光
 所持
 五本平都
 婆之鐔圖



以爲造

裏惣黒塗

勝手神社



天孫臨降の時卅二神相を以て天降す其次に護國後見降すの卅二神也
六十四神式曰愛髪命ハ勝手大明神也

又文治元年静法樂の舞と奏し裝束ありて源義経の鐘を寶藏に
納す此正保年間火災焼失せしを惜むべしト云。順覽記

按大和名所圖會云延尉源義経公の愛妻静御前ハ勝手の社前にて法
衆の舞と奏し衆徒の心を湯く義経主従十二騎と旅せし誠と又を用ひ

して勝成全しと云るハ韃文伐の篇の奥義ともつひつと者れト云く
然るに義経記詳判ハ文治元年十二月十六日の昼の程に静吉野に

判官離れ剣と都すて送きしとて附与せし下部の者も心變りて
賜る所の重宝と盜して静し捨て逐電に静は為方かく追らばその夜ハ

終夜山路と迷ひ翌十七日の暮まで一人古野に漂ひて終に蔵王堂の前
至る途の道者よまされて傳し推現と念しつ何れを此度安穩と都へ

返す之又何れを別と判官と事也かく今一回引りしをせりともつ

母の前司と態々多々んと祈りたる道者、是下向して後、靜正面より多々て
念誦して居たり、大衆亦是と見つけて何事ともられ、権現の御前にも
御法樂の御前、勸むる小辞退々、我と見たり、人かも、思ひれば
多々習い知事たり、別して白拍子の上手にて有れば、音曲も、心も
詞も、及ばぬ、聞人涙と流し、袖とまぢり、無事なり、終り、斯ぞ、颯ひちる

わりのすゝらん乃ふらぬ、たあやまきのわ、は、思ひ、糸有て、離き、面影とつもの
世々忘るごと、別きの殊、悲し、親の別、子に、別れ、勝きて、実悲、き、は
夫妻の別、あり、涙の頻り、す、み、れ、衣引、と、伏、り、斯、有、程、
衆徒のめん、其音、教、草、拳、止、感、入、是、人、有、は、衣、引、と、伏、り、斯、有、程、
所、一人、見、知、る、僧、徒、は、是、静、あり、申、し、猶、捕、て、判、官、の、行、方、と
問、静、終、は、は、む、れ、由、あり、有、の、中、に、詔、り、る、也、修、行、の、坊、取、入、て、漸、々、に
つ、り、其、日、一、日、と、わ、て、明、れ、馬、の、せ、て、人、と、つ、も、北、白、川、を、送、り、も、是、は
衆徒の情、を、申、り、る、也、此、條、に、勝、手、の、社、前、に、は、は、衣、引、と、伏、り、斯、有、程、
西の五十六

られ、舞の装束も、の、蔵、王、堂、にて、奏、せ、時、の、品、ら、ん、然、も、浴、人、の、い
殊、山中、一人、棄、れ、身、の、装、束、の、有、も、覺、べ、又、静、る、白、状、り、て、判、官、當
山、匠、を、有、と、あり、大、衆、お、討、人、向、を、見、て、れ、判、官、と、落、ん、が、舞、を、奏
せ、も、聞、べ、予、未、其、是、非、決、せ、ば、後、の、考、と、候、の、

太平記云、主上勝手の宮の御前と過させのひり、時寮の御馬より、
のひり、御前の中、一首、斯と、思、召、は、も、せ、の、ひ、り、
是、八、則、ち、貞、和、五、年、正、月、十、四、日、高、武、蔵、守、師、直、三、万、余、騎、の、軍、勢、と、平、
古、野、の、皇、居、に、襲、ひ、来、り、主、上、後、村、上、天、皇、天、河、の、眞、賀、名、生、の、辺、に、御、忍、び、
て、黒、木、の、御、所、と、出、さ、せ、の、御、時、の、事、然、る、小、和、州、跡、幽、考、に、後、醍、醐
天、皇、賀、名、生、の、辺、に、落、さ、せ、の、時、は、大、和、名、所、園、會、も、同、是、は、跡、幽、考、の
中、書、寫、せ、る、也、後、醍、醐、天、皇、延、元、三、年、八、月、十、六、日、に、崩、御、太、平、記、貞、和、五、年、
十、二、年、以、後、に、南、朝、二、世、後、村、上、天、皇、の、御、代、あり

師承十首

古鐘 鳥居の左の下にあり今送土中埋て手水鉢と

古鐘 勅曰永録八年乙丑八月九日

土中とあり一尺九寸
口の径一尺九寸

弘化五年迄二百八十四年及びり

袖振山

勝手のやうのよあやう
此山の頂上と那根志山

本朝月令白淨御原天皇
吉野の宮よりして昇る
琴と弾くいづの真のり
りり俄々峯の下より雲氣
忽ち起て神女の形ある人
髻髻して曲つて舞
あり他の人に見るも得ん
天の羽衣の袖と五度翻して舞
し女子もあつたし王と袂
まはてあつたしと狐の
五節の舞の振えり袖ふる山と



西六ノ中十七

吉野拾遺

先帝豊明の節會とせせめりるに余り形をりある有様と思ひしを
のひら流小袖振山の目近く見くはるるもあれ

袖の度でけし女も思ひも去陣乃まぢむりか

後醍醐天皇

と打詠めさ月更るもむねし御夢もも袖振山のよ白雲
棚びとて南殿の御庭乃冬枯梅の梢にさりも流し失くもも

やせめりるふし女の姿乃らちあはれも

かかれをるるやや舞舞してけし女は袖のよ

あやゆき雲隠れも御覧とあせの御ららむ

塔尾山如意輪寺

勝手の社の東の方谷の向う山あり白蔵上人開基也ト云當時浄土宗

本尊 如意輪觀世音 安阿弥夜 左脇檀 十切阿弥陀如来 傳教大師作
後醍醐天皇御自作蔵王権現尊像 御厨子の扉は吉野の熊野の御厨子の
甚上後醍醐帝宸翰と御横の侍り次第記



後醍醐天皇陵
如意輪寺

後醍醐天皇の陵のやうに松と杉
植んと松と杉とてまゝに植ゑられたり
松と杉の下のまゝに
松と杉のやうにまゝに
栗田久盛朝臣

山をむり坂を下ゆに秋の日は斜め
おれんがらるるもて足のかゝりてや
後醍醐寺のみまゝに
寺廟を
まのふらりと
まのふらりと
まのふらりと

後醍醐天皇御宸筆の讀

晴岬月前為教主 金峯嵐底現藏王 斑荊禪客安居砌 縉素群焉滿願望
慈風扇境四流渴 惑霧晴心六度差 碧樹集雲飛鷲嶺 黃金敷地掣龍華
風月澄心文道祖 火雷宥念法陀尊 日藏聖感瑞夢處 大政天為教海繁
兩山梯峻古仙跡 四海船浮權化神 行積僧祇鑒末世 威政鬼類縛其身
又御硯箱あり天皇平日御手馴ゆ所とせ

正行鍬辞世の歌

寺の後上方あり是も辞世の奇なり時鬢髪を切て佛殿に投入其日吉野と
寺のしるの山あり廟前なるの玉垣石の鳥居石燈燼あり又左右の傍は

後醍醐天皇陵

去天保八年丁酉八月十六日五百面の御忌より寺僧方備堂方又吉水院より
塔の形一鍬よりて記し今尚存し付室より墓刻真事

奉為 後醍醐天皇尊儀五百回聖忌威光倍增鎮護國家也

天保八丁酉八月十六日豫修造云

南朝の奉號延元二年八月九日より吉野の至上御不豫の御事あり

りる次第小重くせのい終る八月十六日の丑討に崩御成りり葬禮の御事兼て

遺勅のしる御終焉の御形と改めハ推擲と存じ御座と正して吉野山の

蕪蔵王堂の良む林の真一田丘と高く築て北向に葬り奉る同十一月五日南朝に

群臣相議して先帝の尊號と奉る御在位の風教多く延喜の聖代と追はれりハ

後醍醐天皇の謚奉る多々 太平記一説ハ延元四年壽五十一又前王廟陵記云延

元二年北朝曆應二年也時御年五十一有然れり延元二年ハ曆應元年也曆應

二年ハ延元四年也或正應元年十月二日御誕生の事一説ハ延元二年と

五十一とす

本朝通紀曰 後醍醐天皇崩於吉野時壽五十一此日楠正行歳以一千七百餘騎

衛禁裡和田新二郎歳卒二百騎警固諸門

貞和二年十二月廿七日楠帶刀正行舍弟正時一族打連て芳野の皇居一系ト龍顔と

拜奉る是も最期の泰内と思ひ定て退出正行正時和田新發意舎弟新兵衛同紀六

左衛門子息入野田郎子息入楠將監西河子息開地良圓以下今度の軍小一足も

引ば一處して討死せん約束しりる兵百四十人先皇の御廟一系今度ハ軍難義

あふ討死仕と暇を申て如意輪堂の壁板に各名字を過去帳小書連延て其奥小
各留半座乗花臺 待我陶淨同行人

えんを抄るる人をばやせんむの蓮花もちをばり

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

正行筆成りて書りておのゝと云

且又此時正行塔の扉に鏝と以て辞世の和歌を記し者今尚存して寺に
傳るる然るに去未年攝州池田住山川正宜あれを寫して摹刻し考訂の
言及び賞賛の和歌成りて世に弘くせり是を得てるに出入

南山遺馨引

是正行朝臣當時以北軍日振豫知其不能克臨捐命報國之期取
作而古來傳謂堂壁矣然今猶存之塔扉者甲觀焉近或識之者謬
句公舉刺則失真曰茲余更所以及此奉也

按公戰死也太平記曰正平四年北朝貞和五年正月五日則來戊申當五
百年也然園大曆等為三幸故近世多據之而未知其孰是為
公幸齒亦諸說不同但其中正平三年為廿二者似得安

かゝるしむる心

おりの梓弓

ふ起杖小人

ふをそそ

むる心

吉野山如意輪寺廢塔扉楠金吾和哥也所遺誠心於鏃痕而世罕知焉
故今摹刻以弘于四方爾

與志能也麻義福延由幾麻爾保比氣辛古止婆延
波奈乃以万毛加乎里互

丁未冬錄之

伊居太 源正宣

延元五年夏五月北軍の爲に龍泉赤坂の城を責落し南軍志づく利を
失ふ。主上六觀心寺に在りて安んずる御心も有せられ女院皇后月卿雲客
只薄氷と踏む。時二條禪定殿下の候人そ有る上北面此形勢を見敵乃
この近づく前も妻子ももも京の方へ送り遣し我身も今ハ鬢と切て何なる
山林も世と遁れを思ひて土野辺まで出るるをせめて今度先帝の御廟へ
系り出家の暇も申さんと思ひて只一人御廟へ入りて圓丘の前へ畏てつら
世の中の成行と兼つて少く目睡たる夢の中御廟の震動する事良久暫く
有て圓丘の中へ誠をいけざれば御声も人なりと召れり。東西南北の山は峯より
俊基貞朝是候とて多し。此人ハ君の御謀叛申勸りて者も也とて

去る元徳二年五月廿九日貞朝ハ佐渡國へ斬られ俊基ハ其後鎌倉に高
原を固めて上藤二郎左衛門尉不切き一人也貌を見ま正昔見たりし體
こそ有るが面ハ朱と差々眼の光耀は左右の牙銀針とまら如
上下は生違ひ々其後圓丘の石の扉と挑く音けられ遙く向上して先帝
哀龍の御衣と召き寶劍と抜て右の御手より玉宸の上へ坐し給ふ此御容も
昔の龍顏に替り念も御眸送り裂け御鬚左右分きて只夜叉羅刹の如
く誠不苦いげある御息とつせの度毎御口へ燦々燃出て黒烟天より
上る暫く有る主上俊基資朝と御前近く召き諸も君と惱み世と乱る逆臣
ども誰れ命と討てて哉勅問ひま俊基資朝此事ハとて摩醯修羅王
の前へ議定らつて討手と定め候て何と定め候と問せのよ先
今南方の皇居と襲ひ候は候五畿七道の朝敵ども正成一申付て
候へ一兩日の間に追返候らん仁本右京大夫義長と菊池入道愚鑑
に申付て候伊勢國とて亡び候らん細川相模守清氏と土居得能に

二日争光南北天
 誰圖一日没南山
 松楸四百年々晚
 芳野山鴉不喚還

荒井公康廉平



半山

吉野の陵へ俊基
 資朝の靈魔
 軍の指揮と奏ん



西六ノ六十二

申付て候へ四國小渡つて後亡候へ東國の大將と罷上り候へ富山入道
舎弟尾張守と殊更嗔恚強盛の大魔王新田左兵衛佐義貞と申請候へ
罰にござし申候いつれ輒れござらば候へ道誓を良從とて祈り候へ
首と刎らせ候へらんと也中へ江戸下野守同遠江守二人殊更悪奴と候
へ竜の口よりて我手うけて切候へとて申候いほまて奏申られ
主上誠に御心へげし打咤を給ひ候へら幸親の替へ先へ疾く退治せ
仰りて御座の中へせめひぬと見進らせ夢に忽ち覺るる上北面
此示現の鷲に吉野より又觀心寺へ皈り候へら人々に語り候へら
有る事と思ひ寝の夢に見へら信じて人も無記とて其後
思ひ合とれ悉く割符と合ひ候へら夢に疑ひ人々も世の形勢
感心し候へら不思議あり事と也 太平記大略

松翁廬跡

陵の畔あり

南山巡狩録卷二 後醍醐帝吉野潛幸段注

新井白石君曰

世に吉野拾遺の南朝の事と記し歴々として徴とぐ余野山集に於て
適撰人の名を得る吉房朝臣の所著あり吉房は後醍醐帝に仕へ二心
りて登遐の後思慕やむ難髪して僧とあり自ら松翁と号し松栢歳
寒して操と愛せざるの爰とれり陵の傍へ序に後醍醐公連朝臣世と道
古音と号し相も古琴禪師と參りて宗要と究む 以上大意

竹林院

勝手神社より南子社金剛童子社 官坂町に在り喜藏院の次あり 當院の什物に文治年中頼朝卿御教書
義經追討の書簡あり 射術新流の一卷 院内住職の内射術の名譽あり吉見松佐
米田内門業あり

椿谷椿山寺

當寺は日藏上人修行の地あり延喜十六年此寺に入て剃髪し修行す
あつた年よりして御嶽上人より

日藏は洛城の入りて六代醍醐天皇延喜十六年正月に金峯山の椿山寺に入り
髪を剃り通賢法師の侍り候へら十二年才穀物おひ塩と絶て精進修行す事六年
間あり母の重病に勞れ候へら聞て始めて山と出て洛都へかゝりて母の疾を見舞て
對面と遂ら斯て東寺小居り密教の學問せり候へら金峯山へ入り候へら
度々往來とせり候へら天慶四年の秋金峯山へ入て二十日と限り斷食無言と

秘密供成修せしむに執金剛神のてりて水とりの天童まつて珠味と授け食せむ
尚又蔵王権現ありまのい地獄の苦相と見せり天政威徳天神の宮殿に至るも種々
不思議の事も多し委しむに釈書に見せり

布引櫻

吉野紀行云 布引のさくら高根より各の庭まで咲くを

飛鳥井

布引のさくらとて高根より各の庭まで咲くを

雅章

天皇橋

天皇櫻

梵天社

猿引坂

是より猿の観音堂あり

是より猿の観音堂あり

是より猿の観音堂あり

西國三十三所名所圖會卷之六終



